

# 女子学生のキャリア意識が学習行動に及ぼす影響

上野 淳子

就職への意識は大学生の学習行動を高める。しかし女子学生に関しては、結婚・出産で離職する可能性があるため、短期大学生の就職意識は高いが勤続意識は低く、四年制大学生はその逆であることが示されており、就職への意識と学習行動の関係は一樣ではない可能性があった。そこで、女子学生の学歴、将来希望する働き方、性役割態度を加味して就職意識と学習行動の関連を検討した。四年制大学の女子学生79名、短期大学の女子学生159名に質問紙調査を実施した結果、大学生は勤続を希望する者が最も多く、短大生は専業主婦になったのち非正規雇用となることを希望する者が多かったが、就きたい職業は短大生のほうが明瞭であった。専業主婦や非正規雇用といった性役割に沿った働き方を志向しないほど平等主義的性役割態度が高く、大学生であること、性役割に沿った働き方を志向しないこと、職業レディネスが高いことが現在の学習行動を高めることが明らかとなった。卒業直後にどのような職業に就きたいかという意識の高さは長いスパンでのキャリアへの意識の高さとは必ずしも一致しないため、長期的、現実的視点に立ったキャリア教育を行うことが女子学生の学習行動を高めると考えられる。

**キーワード：**大学生、短期大学生、職業レディネス、性役割、キャリア教育

**Key Words：** university student, junior college student, vocational readiness, gender role, career education

## 1. 問題と目的

大学生の学業への取り組みを規定する要因は様々であるが、その一つに就職への意識がある。近年の大学生は学業に熱心に取り組む傾向が指摘されているが、それに関連して以下のことが示されている。まず、学業に熱心である背景には大学進学率の増加と就職難がある(山田, 2007a)。大卒であっても良い就職ができる保証はないため、就職活動において少しでも有利となるよう学業に励むのである。実際、大学での学業が就職にも良い影響を与えると考える学生は多く(山田, 2007b)、就職意識の高い学生ほど学業に熱心である(半澤, 2010, 2011; 畑野・高橋, 2011; 西本, 2008)。就職への意識の高さは学業への熱心さを高めるだけではなく、就職活動を盛んに行わせ、第一志望の内定率を高める効果がある(京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会, 2009)。この場合の学業とは、資格取得や仕事で役立つ授業だけに限らない。就職活動に直接関係しない教養的知識が軽視される傾向もあるが(山田, 2007b)、大学の学業に熱心な者は、大学の成績や人格など努力によって変えられる要素が就職の際に重視されると考えている(西本, 2008)。事実、ゼミナール活動などへの取り組みによって、主体性、課題解決能力、コミュニケーション能力など社会人として求められる能力を身につけられるため、学業重視の大学生

活は就職に有利となる(讀賣新聞, 2010)。特に人文学系の大学においては学業と将来の仕事は乖離したものと考えられがちであるが、学業に励み良い成績を取るとは人格面でも能力面でも仕事に役立つ成長を促し、企業に対してもそれを保証することになる。以上は主に四年制大学を対象とした研究によって得られた知見である。短期大学生に焦点を当てた研究は少ないが、保育士、幼稚園教諭を目指す短期大学の女子学生を調査した廣瀬・高良・金城・廣瀬(2006)は、短期大学の授業は進路に役立つと評価されることを示している。四年制大学と同様に、就職への意識と学業行動の関連がうかがえる結果である。

しかし、四年制大学と短期大学の学生を一律に論じることには慎重でなければならない。また、特に女子学生においては、就職への意識の高さが、仕事に価値を見出すこと、将来働き続けること、男女共同参画の意識が高いことを示すわけではないことにも注意する必要がある。大学生の将来像を検討した上野(2012)は、短期大学に所属する女性は家庭中心で非典型の仕事志向するが、四年制の女子大学生の将来像は男子大学生に近く、家庭や仕事への意識はジェンダー間より学歴間の差が大きいことを示した。従来、性別役割分業を前提とした将来像は女性全体が共有しているものではなく、学歴によって異なるのである。また、上野(2012)では同時に、女子短大生は四年制大学に所属する男女よりも就きたい仕事ははっきりしていることも示された。従来、職業への意識の高さは女性役割、性別役割分業の否定と関連づけられてきたが(柏木・永久, 1999; 鈴木, 1996a, 1996b; 若林・後藤・鹿内, 1983)、上野(2012)では性別役割分業に肯定的であるからといって就職への関与が低いわけではなく、むしろ高かったのである。この逆説的な現象は、短大生は大学生より就職が身近であること、専攻が資格など職業に直結するものであるため将来就職業が定まりやすいこと、職業にもジェンダー・ステレオタイプが存在し、男性的と見なされる“男性職”と女性的と見なされる“女性職”が存在すること(安達, 2009)が原因だと考えられる。したがって、就職への志向が高いほど性別役割分業に否定的であると単純に判断することはできず、勤続の意向や希望の勤務形態などを考慮する必要がある。以上のことから、高い就職意識が高い学習行動に結びつくと指摘されていても、女子学生においては、特に学歴によって勤続するかどうかの見通しが異なるため、就職意識と学習行動が一致しない可能性がある。これまでの就職への意識と学習行動を扱った研究はジェンダーの視点を欠いており、女子学生にとっての結婚、出産を含めたキャリアプランの重要性を考慮していない。

本研究の目的は、女子学生の学歴の差、つまり四年制大学か短期大学かに着目し、就職への意識がどのように異なるか、それが学習行動にどのような影響を与えるかを明らかにすることである。卒業直後の就職だけではなく、結婚や出産の際にどのような働き方を選択するかを含めて検討する。また、ライフコース選択に影響を与える要因として、性別役割に対する態度を考慮する。なお、将来の働き方については、希望と予想をわけて捉える必要がある。独身者の調査では、結婚・出産後も働き続けるライフコースは理想として選択される割合は高いが、予定するコースとしては選択されにくい(国立社会保障・人口問題研究所, 2011)。出産前後で就労継続している女性はこの20年間2割強しかおらず(内閣府, 2011)、子育て後の就労を希望していても、現実には働いていないか、フルタイム希望でもパート・アルバイトにしかつけないと

いった現実があるからである(内閣府男女共同参画局, 2007)。また、近年 20 代・30 代の若年層を中心に専業主婦を希望する者が増えているが(内閣府, 2009)、若年層の低所得化によって実際には専業主婦を続けることは困難な場合が多い(内閣府, 2011; 山田, 1999)。つまり、女性は勤続を希望しても実際は結婚・出産で退職する可能性、専業主婦を希望しても実際は働くことになる可能性が高いのである。

## 2. 方法

### (1)調査参加者と手続き

2012 年 10 月から 11 月にわたり、大阪府下の私立大学に所属する女子学生を対象として質問紙調査を行った。授業終了直後の教室および大学構内で調査を依頼し、その場で質問紙を配布、回収した。回答に不備があった者を除いた最終的な調査参加者は 238 名であり、そのうち四年制大学に所属する女子学生(大学生)は 79 名(33.19%)、短期大学に所属する女子学生(短大生)は 159 名(66.81%)であった。専攻は大学生が人文系、短大生が保育系である。学年は、大学生・短大生とも 1 年生が過半数を占め全体で 143 名(60.1%)、年齢は 18 歳から 23 歳( $M=19.11$ ,  $SD=0.91$ )であった。

### (2)調査内容

希望の働き方 「将来あなたが結婚や出産をした後、どのような働き方を希望しますか。あなたの希望に最も近い文章を一つだけ選び、【 】の中に○をして下さい」と教示し、「結婚後や出産後も働き続けたい」(勤続希望)、「結婚後や出産後は働かず、専業主婦になりたい」(専業主婦希望)、「いったん退職して専業主婦になり、子どもがある程度大きくなったら正規雇用(正社員など)で働きたい」(専業主婦→正規雇用希望)、「いったん退職して専業主婦になり、子どもがある程度大きくなったら非正規雇用(パート、派遣など)で働きたい」(専業主婦→非正規雇用希望)、「結婚や出産をするつもりはないので、いずれもあてはまらない」の 5 つから選択させた。

予想の働き方 「将来あなたが結婚や出産をした後、実際にはどのような働き方をすることになると思いますか。あなたの予想に最も近い文章を一つだけ選び、【 】の中に○をして下さい」と教示し、「結婚後や出産後も働き続けるだろう」(勤続予想)、「結婚後や出産後は働かず、専業主婦になるだろう」(専業主婦予想)、「いったん退職して専業主婦になり、子どもがある程度大きくなったら正規雇用(正社員など)で働くだろう」(専業主婦→正規雇用予想)、「いったん退職して専業主婦になり、子どもがある程度大きくなったら非正規雇用(パート、派遣など)で働くだろう」(専業主婦→非正規雇用予想)、「結婚や出産をするつもりはないので、いずれもあてはまらない」の 5 つから選択させた。

学習行動尺度 光浪(2010)の尺度を使用した。「勉強する時に、ここまではやろうという目標や計画を立てる」、「授業中は、先生がホワイトボードや黒板に書いたことや、パワーポイントの内容などは、きちんとノートに書いている」など 17 項目から成り、大学における普段の学習や授業への取り組みの高さを測定できる。「非常にあてはまる」から「全く当てはまらない」までの 4 件法で回答を求めた。

職業レディネス尺度 就職への意識を測定するために、職業選択に対する心理的準備状態である職業レディネスを把握できる下村・堀(1994)の尺度を用いた。全 15 項目に対し、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 5 件法で回答を求めた。

平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S) 性別役割分業への意識を測定するために鈴木(1994)の尺度を用いた。個人的レベルにおける男女平等主義的態度を測定するものである。全 15 項目に対し、「まったくそのとおりだと思う」から「ぜんぜんそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた。

### 3. 結果と考察

#### (1)希望の働き方、予想の働き方の分析

希望の働き方、予想の働き方について、「結婚や出産をするつもりはないので、いずれもあてはまらない」を選択した者は、前者で 4 名(1.69%)、後者で 5 名(2.11%)とごく少数であったため、以降の分析から除外した。

希望の働き方、予想の働き方の度数、 $\chi^2$ 検定、残差分析の結果を Table1 に示した。希望する働き方は大学生と短大生で異なっており、大学生は「勤続希望」が最も多く( $n=29$ , 36.70%)、短大生は「専業主婦→非正規雇用希望」が最も多かった( $n=65$ , 41.14%)。しかし、予想する働き方には違いが見られず、いずれも「専業主婦→非正規雇用予想」が最多であった(大学生  $n=31$ , 39.24%; 短大生  $n=75$ , 47.47%)。学歴によって希望する働き方に差があり、短大生は大学生よりも従来のジェンダー役割に合致した働き方を希望する傾向があることがわかった。しかし、予想する働き方は学歴差が見られず、希望と予想をわけて捉える必要性が改めて明らかとなった。

Table1 希望の働き方、予想の働き方の  $\chi^2$ 検定結果

		勤続	専業主婦	専業主婦→ 正規雇用	専業主婦→ 非正規雇用	$\chi^2$ 検定結果
希望の 働き方	大学生	$n$	29	16	10	21
		調整済み残差	3.14**	1.09	-1.95	-2.04*
	短大生	$n$	30	24	38	65
		調整済み残差	-3.14**	-1.09	1.95	2.04*
予想の 働き方	大学生	$n$	22	11	12	31
		調整済み残差	1.31	-0.06	-0.05	-1.05
	短大生	$n$	33	23	25	75
		調整済み残差	-1.31	0.06	0.05	1.05

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

希望の働き方と予想の働き方の対応関係を Figure1 に示した。大学生、短大生に関わらず、

「勤続希望」および「専業主婦→非正規雇用希望」の者はほとんどが実際そうなるだろうと予想していた。希望と予想が最も大きく異なるのは大学生の専業主婦希望者であり、希望が叶うと予想する者は4分の1しかおらず、半分以上の者は非正規雇用で働き出すことになるだろうと予想していた。しかし、短大生の専業主婦希望者は半分近くが「専業主婦予想」であり、専業主婦に専念したいという希望の実現性を大学生よりも高く見積もっていた。「専業主婦→正規雇用希望」の者は、大学生、短大生ともその実現を予想する者は半分程度であり、40%程度が非正規雇用を予想していた。

つまり、Table1で示したように大学生で働き方の希望と予想が異なっていたのは、大学生は勤続を希望するもの実際には専業主婦ののち非正規雇用となると予想しているからではない。大学生の勤続希望者はその実現に楽観的であるが、専業主婦志向の者が実際には非正規雇用として働かざるを得ないであろうと予想しているのである。また、学歴に関わらず、いったん退職して専業主婦となったのち正規雇用で社会復帰することは困難だろうと考えている者が比較的多いことも明らかとなった。

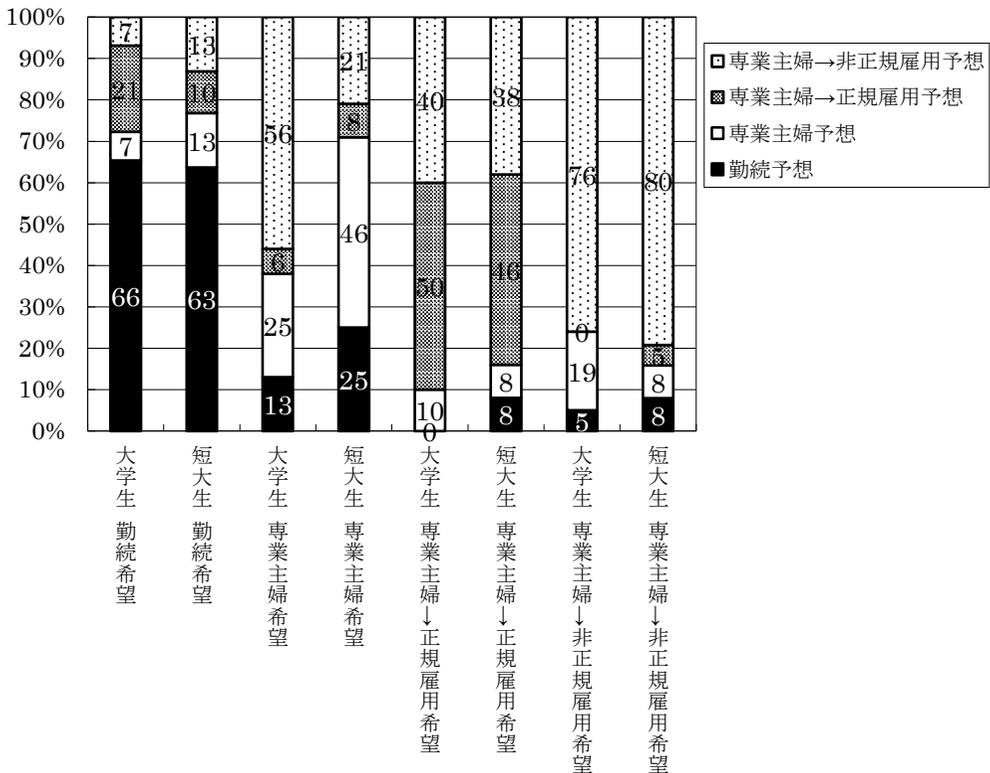


Figure1 希望の働き方と予想の働き方の対応(値は%)

## (2)学習行動尺度、職業レディネス尺度、SESRA-S の検討

学習行動尺度の信頼性係数(Cronbach の  $\alpha$  係数)を算出したところ、 $\alpha=.85$  と十分に高かった。

職業レディネス尺度について因子分析(主因子法・promax 回転)を行った。結果、因子負荷量が低かった 2 項目を省いた 13 項目について下村・堀(1994)と同様の 3 因子構造が見出されたため、下村・堀(1994)と同じ因子名を用いることとした。第 1 因子は、どのような職業に就きたいかがはっきりしている「明瞭性」、第 2 因子は、職業選択への関心が高い「関与」、第 3 因子は職業選択を重視しない「非選択性」であった。因子分析の結果と信頼性係数を Table2 に示した。「非選択性」の  $\alpha$  値がやや低めではあるが、一定の信頼性はあると考えられるため、下位尺度化して以後の分析に用いることとした。

SESRA-S の信頼性係数(Cronbach の  $\alpha$  係数)は  $\alpha=.78$  と十分な値であった。

Table2 職業レディネス尺度因子分析(主因子法・promax 回転)結果

		因子 1	因子 2	因子 3
<b>明瞭性</b>	$\alpha=.83$			
・自分のつきたい職業や職種を聞かれても、的確に答えられるだろうと思う		<b>.882</b>	-.068	-.064
・自分のつきたい職業の範囲はかなり絞れている		<b>.806</b>	.008	.052
・自分のつきたい職業は前から決まっており、現在でもそれに向けて準備を進めている		<b>.793</b>	-.041	-.003
・自分が興味をもっている職業の内容は十分知っているので、就職のためにどのような条件が必要であるかはよくわかっている		<b>.580</b>	.083	.103
・自分の適性は、これまでの経験からかなり客観的に把握している		<b>.334</b>	.195	-.065
<b>関与</b>	$\alpha=.73$			
・職業の選択にかなり関心がある		-.151	<b>.708</b>	-.178
・職業を選択する事に対してかなりやる気がある		.150	<b>.570</b>	-.231
・自分の選んだ職業を通じて自分にどれだけの力があるのか確かめてみる事に、大きな関心を持っている		.191	<b>.550</b>	.131
・就職活動は特別苦にならず、どちらかと言えばやくやってみたいと思っている		.070	<b>.545</b>	.251
・社会に出てから役立つ知識や資格を得る事に、大きな関心をもっている		-.052	<b>.512</b>	.008
<b>非選択性</b>	$\alpha=.63$			
・どんな職業でもいいから、まず適当なところに就職し、将来のことはその後でじっくり考えれば良い		-.135	.118	<b>.840</b>
・職業選択はくじ引きのようなもので、ある人がその職業についているのは偶然の結果である		.104	.112	<b>.590</b>
・自分が将来どうなるのかまったくわからないのだから、自分の適性にあった職業を考えても意味がない		.067	-.143	<b>.475</b>

**(3)職業レディネス尺度、SESRA-S の学歴差**

大学生、短大生で職業レディネス下位尺度、SESRA-S の得点に違いが見られるか  $t$  検定を行ったところ、職業レディネス下位尺度「明瞭性」のみ有意差があり、短大生が大学生よりも高かった(Table3)。上野(2012)と同じく、短大生は就職が間近であり、かつ専攻が職業と直結する機会が多いため、就きたい職業は明確であることがわかった。将来希望する働き方の違いからは大学生のほうが平等主義的性役割態度を有していると考えられたが、SESRA-S には有意な差が見られなかった。

Table3 学歴間の  $t$  検定結果

		大学生		短大生	$t$ 値
職業 レ ディ ネス	明瞭性	15.31 (5.02)	<	18.09 (4.03)	-4.25 ***
	関与	17.09 (3.55)		16.14 (3.51)	1.96
	非選択性	6.42 (2.36)		6.28 (2.04)	0.44
SESRA-S		53.26 (7.43)		52.75 (6.51)	0.54

\*\*\* $p<.001$  カッコ内は  $SD$

得点範囲: 明瞭性 5-25 点

関与 5-25 点

非選択性 3-15 点

SESRA-S 15-75 点

**(4)職業レディネス尺度、SESRA-S の希望の働き方による差**

希望の働き方を独立変数、職業レディネス下位尺度、SESRA-S を従属変数とする一元配置分散分析、多重比較(Dunnett の T3)を行ったところ、SESRA-S のみで有意差が見られ、「勤続希望」の者の得点が「専業主婦→非正規希望」および「専業主婦希望」の者の得点よりも高かった(Table4)。勤続の意識が高いからといって就職の意識が高いとは限らず、女子学生においては結婚・出産を含めた長期の視点のキャリアプランが必要であることが改めて示される結果となった。

Table4 希望する働き方による一元配置分散分析・多重比較結果

		勤続	専業主婦	専業主婦→ 正規雇用	専業主婦→ 非正規雇用	F値	多重比較結果 (Dunnett の T3)
職業 レディ ネス	明瞭性	17.76 (3.58)	15.82 (5.61)	17.57 (4.52)	17.06 (4.63)	1.60	
	関与	16.88 (3.00)	16.36 (4.64)	16.57 (3.76)	16.09 (3.11)	0.60	
	非選択性	6.21 (2.02)	6.63 (2.83)	6.49 (2.06)	6.21 (1.95)	0.48	
SESRA-S		56.10 (6.67)	49.59 (7.48)	53.43 (5.95)	51.84 (6.08)	9.05 ***	主婦, 主婦→非正規 < 勤続

\*\*\* $p < .001$  カッコ内は *SD*  
得点範囲は Table3 を参照

既に Table1 で示したように、学歴によって希望の働き方は異なっており、大学生は勤続希望、短大生は専業主婦ののち非正規雇用希望が多い。Table3 に示した分析結果では SESRA-S 得点に学歴差が見られなかったが、希望する働き方によって SESRA-S の得点が異なるという今回の結果は、学歴と性役割への態度は働き方を媒介として間接的に関連していることを示唆するものと言えよう。

##### (5) 学習行動に影響する要因

学習行動を従属変数、学歴、希望の働き方、職業レディネス下位尺度、SESRA-S を独立変数とする重回帰分析を行った。なお、学歴は大学生を 1 点、短大生を 2 点としてダミー変数化した。希望の働き方は「専業主婦希望」を 4 点、「専業主婦→非正規雇用希望」を 3 点、「専業主婦→正規雇用希望」を 2 点、「勤続希望」を 1 点とし、得点が高いほど性別役割分業に沿った働き方となるよう調整した。結果を Figure2 に示した。学歴、希望の働き方、職業レディネスの 3 つの下位尺度から有意なパスが見られ、短大生より大学生であること、専業主婦になることや非正規雇用といった性役割に沿った働き方を志向しないこと、職業選択の準備ができていることが現在の学習行動を高めることが示された。職業レディネスが学習行動に影響するのはこれまでの研究と同様の結果であったが(半澤, 2010, 2011)、就きたい職業がはっきりしている短大生よりも大学生のほうが学習行動を行っていることから、学歴とそのキャリアプランによっては就職への意識が高いことが学習行動を高めるとは一概に言えないことが明らかとなった。これまでの結果で示したように、大学生は短大生よりも勤続を志向するため、学習行動をより行うと考えられる。また、SESRA-S から学習行動への直接の影響を見出すことはできなかったが、将来希望する働き方は平等主義的性役割態度によって異なっているため、性役割の支持は間接的に学習行動を損なっていると言える。

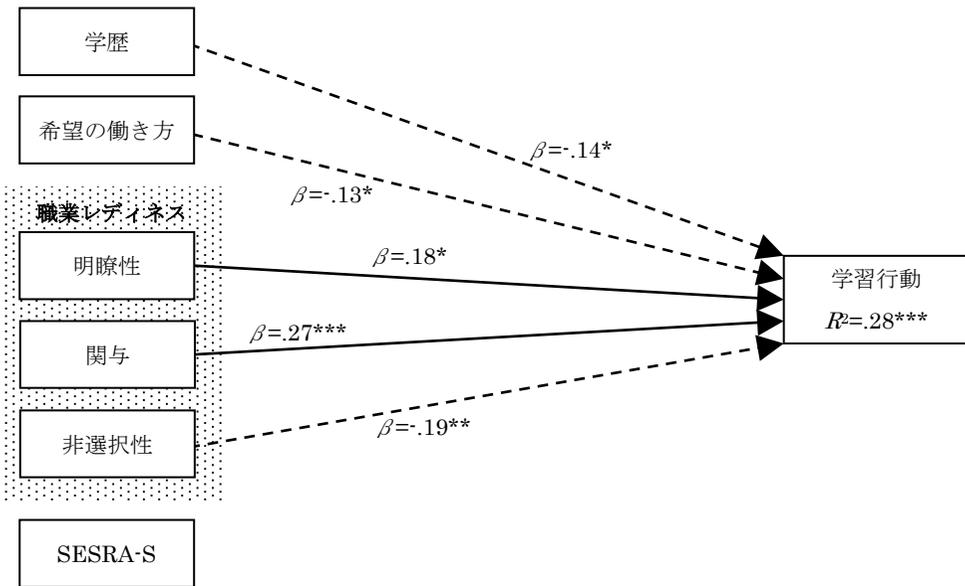


Figure2 学習行動の重回帰分析結果(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

#### 4. 総合的考察

四年制大学と短期大学の女子学生を対象とした本研究でも、従来の研究と同様に職業レディネスが学習行動を高めることが示された。しかし同時に、結婚、出産を経てどのような働き方をしたいかという女性ならではのキャリアプランによっても学習行動が異なることが示され、勤続への意識が高い大学生の学習行動が高いことが明らかとなった。卒業直後にどのような職業に就きたいかという意識の高さは長いスパンでのキャリアへの意識の高さとは必ずしも一致しない。長期的視点に立ったキャリア教育を行うことが女子学生の学習行動を高めると考えられる。

なお、大学生の学習行動が高い原因については他にも以下の可能性が考えられる。まず、大学入学以前の学習習慣が異なり、それがひいては四年制大学に入学するか短期大学に入学するかという進路の差を生んでいるという可能性である。また、大学生は短大生よりも学習により自律的に取り組んでいる可能性もある。伊田(2003)は、教員志望の学生を調査し、その志望の程度に関わらず、学びに対し興味、発見、成長といった価値を見出すことは自律的学習を促すことを見出している。大学生は短大生よりも就きたい職業ははっきりしないが、職業と関連しない価値を学習に見出しているのかもしれない。どの原因が大学生と短大生の学習行動の差を生んでいるかについてのより詳細な検討は今後の課題である。

希望と予想の働き方を比較したところ、専業主婦希望の大学生と短大生で予想が異なっていた。大学生は非正規雇用として働くことになると予想する者が多かったが、短大生は専業主婦の希望が叶うと予想する傾向があった。現実的には、女性の雇用者のうち約6割は非正規雇用であるが(総務省統計局, 2014)、学歴が高いほど正規雇用で働き続けられる可能性は高く(白川,

2008; 若松・柏木, 1994)、専業主婦を希望する場合も学歴が高いほうがその実現度は高くなる。すなわち四年制大学卒の女性のほうが短期大学卒の女性よりも専業主婦率は高い(若松・柏木, 1994)。高学歴の女性は同階層の男性と結婚するため、夫の収入だけで暮らしていけるケースが比較的多いのである。小倉(2007)は、短大卒女性は自らの仕事内容や収入に期待しないため経済力のある男性と結婚し専業主婦となることを望むと指摘しており、上野(2012)は、女子短大生は四年制大学的女子学生よりも自分の収入を期待せず結婚・出産への希望が高いという結果を得ているが、本研究では専業主婦志望の女子短大生は希望だけでなく実際もそうなる予想する傾向が示された。しかし上述した実態から、これは非現実的予想であると言わざるを得ない。働かなくてもすむだろうという非現実的に楽天的な将来予想は、将来の貧困、非婚化、少子化につながる可能性がある。現実の社会情勢を知った上で適切なライフプランが描けるようなキャリア教育が必要であろう。

鈴木(1994)では、SESRA-S の得点に高校・専門学校・短大群( $M=48.13$ ,  $SD=8.60$ )と四年制大学・大学院群( $M=57.93$ ,  $SD=8.65$ )で有意な差があり、学歴が高いほど平等主義的性役割態度を有していることを示しているが、本研究では大学生と短大生で SESRA-S の得点に差はないという結果となった。その原因として、鈴木(1994)は高校・専門学校も含めたより幅広い学歴群であるため差が出やすかった可能性、また男女共同参画社会が推進されてきた結果学歴間の差が縮小した可能性が考えられる。しかし、希望する働き方が学歴によって異なり、勤続を志向する者は SESRA-S の得点が高いという本研究の別の結果からは、やはり大学生は短大生とは異なる性役割態度を有している可能性が高い。短大の女子学生は固定的性別役割分業を否定しつつも男性に精神的・経済的に依存しようとする意識があると指摘されていることから(東福寺, 2010)、学歴と、どのような性役割を支持しているのか、どのような平等意識を持っているのかについては今後詳細に検討される必要がある。

## あとがき

本研究の一部は、日本教育心理学会第 55 回総会(2013 年 8 月 18 日、於法政大学)で発表した。

## 引用文献

- 安達智子 2009 職業のジェンダー認知と自己効力 II~男性職は男っぽく、女性職は女らしい? 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 40
- 半澤礼之 2010 大学生の学業行動と職業レディネスの関連~学業と職業の接続に対する意識という観点からの検討 日本青年心理学会第 18 回大会発表論文集, 55-56
- 半澤礼之 2011 大学生の学習行動と自己決定~学びを通じた職業展望の明瞭さの観点から 日本青年心理学会第 19 回大会発表論文集, 46-47
- 畑野 快・高橋雄介 2011 大学生のキャリア意識が学習動機づけと学習行動に与える影響 日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会発表論文集, 114
- 廣瀬 等・高良美樹・金城 亮・廣瀬真喜子 2006 短期大学生の進路に関する研究~働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響 琉球大学教育学部紀要, 68, 191-204
- 伊田勝憲 2003 教員要請過程学生における自律的な学習動機づけ像の検討~自我同一性、達成動機、職

- 業レディネスと課題価値評定との関連から 教育心理学研究, 51, 367-377
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値~今、なぜ子を産むか 教育心理学研究, 47, 170-179
- 国立社会保障・人口問題研究所 2011 第14回出生動向基本調査結婚と出産に関する全国調査~独身者調査([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf))
- 京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会 2009 大学生のキャリア意識調査 2007 追跡調査報告書~4年生・就職編([https://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa\\_report2007-02.pdf](https://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa_report2007-02.pdf))
- 光浪睦美 2010 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響~認知的方略の違いに注目して 教育心理学研究, 58, 348-360
- 内閣府 2009 男女共同参画社会に関する世論調査(<http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-danjo/index.html>)
- 内閣府 2011 平成23年版子ども・子育て白書(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23pdfhonpen/23honpen.html>)
- 内閣府男女共同参画局 2007 女性のライフプランニング支援に関する調査(<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/kansieikyo/raifupuran1903.pdf>)
- 西本佳代 2008 大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 57, 125-132
- 小倉千加子 2007 結婚の条件 朝日新聞出版
- 下村英雄・堀 洋道 1994 大学生の職業選択における情報収集行動の検討 筑波大学心理学研究, 15, 209-220
- 白川俊之 2008 若年労働市場における非典型雇用・無業とジェンダー~JGSS 統合データによる分析から JGSS で見た日本人の意識と行動: 日本版 General Social Surveys 研究論文集, 7(JGSS Research Series No.4), 133-145
- 総務省統計局 2014 労働力調査(基本集計)平成26年(2014年)1月分(<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/201401.pdf>)
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成 心理学研究, 65, 34-41
- 鈴木淳子 1996a 若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について~就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン 社会心理学研究, 11, 149-158
- 鈴木淳子 1996b 若年女性のキャリア選択規定要因に関する縦断的研究~同一組織における就労継続および転職 心理学研究, 67, 118-126
- 東福寺一郎 2010 短期大学生の男女共同参画意識(II)~質問紙調査に基づいて 三重短期大学紀要, 58, 39-47
- 上野淳子 2012 ジェンダーおよび学歴による将来像の違い 四天王寺大学紀要, 54, 183-196
- 若林 満・後藤素理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造~保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 30, 63-98
- 若松素子・柏木恵子 1994 「親となること」による発達~職業と学歴はどう関係しているか 発達研究, 10, 83-98
- 山田浩之 2007a 学生の変貌 山田浩之・葛城浩一(編) 現代大学生の学習行動 RIHE, 90, 1-10
- 山田浩之 2007b 大学生の学習行動 山田浩之・葛城浩一(編) 現代大学生の学習行動 RIHE, 90, 11-23

上野 淳子

山田昌弘 1999 家族のリストラクチュアリング~21世紀の夫婦・親子はどう生き残るか 新曜社  
読賣新聞 2010 いま就活は(5)~学業の大切さ再認識 3月12日 ([http://www.yomiuri.co.jp/osaka/feature/kansai1286327824849\\_02/news/20101018-OYT8T00722.htm](http://www.yomiuri.co.jp/osaka/feature/kansai1286327824849_02/news/20101018-OYT8T00722.htm))